

主 題：わたしを覚えていなさい

聖書箇所：コリント人への手紙第一 11章23-28節

Iコリント11：23-28

- :23 私は主から受けたことを、あなたがたに伝えたのです。すなわち、主イエスは、渡される夜、パンを取り、
- :24 感謝をささげて後、それを裂き、こう言われました。「これはあなたがたのための、わたしのからだです。わたしを覚えて、これを行いなさい。」
- :25 夕食の後、杯をも同じようにして言われました。「この杯は、わたしの血による新しい契約です。これを飲むたびに、わたしを覚えて、これを行いなさい。」
- :26 ですから、あなたがたは、このパンを食べ、この杯を飲むたびに、主が来られるまで、主の死を告げ知らせるのです。
- :27 したがって、もし、ふさわしくないままでパンを食べ、主の杯を飲む者があれば、主のからだに血に対して罪を犯すこととなります。
- :28 ですから、ひとりひとりが自分を吟味して、そのうえでパンを食べ、杯を飲みなさい。

すべての礼拝行為が主に喜ばれるのではありません。旧約のアモス書5：22、23にはこのように書かれています。「:22 たとい、あなたがたが全焼のいけにえや、穀物のささげ物をわたしにささげても、わたしはこれらを喜ばない。あなたがたの肥えた家畜の和解のいけにえにも、目もくれない。:23 あなたがたの歌の騒ぎを、わたしから遠ざけよ。わたしはあなたがたの琴の音を聞きたくない。」と。

Iコリント11：23-28のみことばが私たちに教えていることは聖餐式に関してであることは明らかです。皆さんも何度もこの箇所を読まれているでしょう。確かに、パウロは聖餐式について教えを与えています。しかし、聖餐式に関するパウロの教えはこの箇所が初めてではありません。実は、10章16節からそのことを教えています。なぜ、パウロは10章でも11章でも繰り返して教えたのでしょうか？その理由をパウロは11：17でこのように記しています。「ところで、聞いていただくことがあります。私はあなたがたをほめません。あなたがたの集まりが益にならないで、かえって害になっているからです。」と。大変厳しいことを、パウロはコリント教会に告げました。本来なら、信仰者が集まっている集まりはみなにとって益であるはずなのに、害になっていると言うのです。確かに、コリントの教会は大変な問題を抱えていました。コリント人への手紙を見ていくとそのことが分かります。兄弟間に争いがありました。誤った教えが蔓延していました。また、不道徳が横行していました。性的不道徳です。そのような罪を悔い改めることもなく、却って、教会はその罪を受け入れていたなどと、考えられないことが起こっていました。また、一番悲しいことは、この教会の中には一致がなかったことです。11：20を見ると、パウロが聖餐式について教える前にこのように言っています。「しかし、そういうわけで、あなたがたはいっしょに集まっても、それは主の晩餐を食べるためではありません。」。「主の晩餐」、そして、「聖餐式」、この当時の人たちは集まって晩餐会を催しました。夕食です。そして、その夕食が終わった後に聖餐式をもちました。ここに問題がありました。裕福な人たちはいろいろな食べ物を持ち寄ってそれらを食べて飲んで、それから聖餐式を迎えました。裕福でない人たちは空腹のままで聖餐式に出て来ました。ですから、聖餐式には、満腹の人たちと片や貧しくて何も食べていない人たちが集まっていたのです。もっと厄介なことは、この中に酔っている人たちがいたのです。夕食の後で聖餐式に出るからです。そのような問題がありました。

もう一つ言うと、この教会には一致がなかった、分裂があったことをパウロは指摘しています。人々は非常に利己的でした。必要を抱えている人のことなど気にも留めなかったのです。他の人のために労するよりも、人への批判に時間を割いていました。互いに助け合っていた初代教会とは全く違っていました。想像できるでしょう？教会の中で悪い噂を立ててみたり、だれかの批判を試みたり、悪口を言い合っていたりと、どうして神はそのような教会を祝されるのでしょうか？どうしてそのような人を祝されるのでしょうか？

そこで、パウロはこのレッスンをこの教会に与えたのです。確かに、見た目は彼らは信仰的でした。聖餐式を守っています。でも、悲しいことに、その聖餐式は神に喜ばれていなかったのです。それだけでなく、それは主の祝福を得るものではなかったのです。悲惨なことです。でも、気を付けなければいけません。彼らと同じようなことが私たち自身にも起こるのです。たとえば、教会のいろいろな集会に

熱心に参加し、犠牲的な捧げ物をささげ、献身的な奉仕をしているかもしれませんが、主がそれを喜んでおられるかどうかです。あなたはそれで満足しているかもしれませんが。人々はそれをすばらしいと言うかもしれませんが。でも、問題は、主がそれを喜んでおられるかどうかです。

ですから、私たちがいつも考えなければいけないことは、どの時代であろうと、どの人たちであろうと、どのような心をもってそれをしているかです。熱心な信仰をもっているように思えても、心の風化が進んでいたり、熱心に働きをしても、心の空洞化が進んでいることがあります。信仰の形骸化とは、進行の早い病気が知らず知らずのうちにからだを蝕んでいくように、信仰の病いも私たちが気が付かないうちに心を蝕んでいきます。パウロはこのような大変世的な教会であるコリント教会が、主の前に悔い改めて神に立ち返ることを望んでいました。なぜなら、パウロはこの教会を立ち上げたからです。第二次宣教旅行の時にパウロはコリントを訪問し、この教会が誕生したのです。一年半の間そこに滞在し、みことばを教えました。ゆえに、パウロはこの教会を愛し、この教会が罪から離れて真に神の栄光を現わす教会になってほしいと願っていたのです。それでパウロは聖餐式に関する大切な教えを彼らに与えるのです。今から私たちはそれを学んでいきます。なぜなら、私たちは今日、礼拝の後に聖餐式を持つからです。

☆主がお喜びになる聖餐式について

今から学ぶのは聖餐式に関することだけではありません。私たちの信仰者としての生き方全般に関わることです。ですから、大切なことを学んでいきますが、その前に二つのことに注目してください。

◎パウロが言っている二つのこと

23節に「私は主から受けたことを、あなたがたに伝えたのです。」とあります。

(1) 主から受けたこと

パウロが言うことは「私が与える教えは自分の考えに基づくものではない」ということです。主ご自身のものだという点を強調しているのです。

(2) 私は

「私」ということばが最初に出てきます。ギリシャ語でも最初に出て来ることばが「私」です。これも「私」を強調しているのです。

つまり、パウロは23節の初めで「今から私が教えることは、私が考え出したことではなく、また、だれかから聞いたことでもなく、神ご自身が直接私に与えてくれたもので、私自身がそれを受けたのだ。」と言って、神からいただいたメッセージを伝えようとするのです。ガラテヤ1:11-12を見てください。「:11 兄弟たちよ。私はあなたがたに知らせましょう。私が宣べ伝えた福音は、人間によるものではありません。:12 私はそれを人間からは受けなかったし、また教えられもしませんでした。ただイエス・キリストの啓示によって受けたのです。」と、パウロは同じことを言っています。

1. 聖餐式についての説明 23-25節

1) パンについての説明 23-24節

23節「…すなわち、主イエスは、渡される夜、パンを取り、」、「渡される夜」とは主イエス・キリストが捕えられるその夜のことで、イエスが捕えられる前、同じ日の夜のことで、そのことをパウロはここで明らかにしました。捕えられる前、イエスと弟子たちはエルサレムの二階座敷で「最後の晚餐」をもっていました。一般的に「最後の晚餐」と言われますが、彼らは過越の食事をしていました。そのための準備の様子が福音書に書かれています。もちろん、福音書を見ても、パウロの書いたパウロ書簡を見ても、その最後の食事、過越の食事の様子は詳しくは書かれていません。しかし、記されていることが実は私たちにとって非常に大切なことなのです。もう一度見てください。23-24節「…すなわち、主イエスは、渡される夜、パンを取り、24: 感謝をささげて後、それを裂き、こう言われました。」、実は、イエスが何か特別なことをしたわけではありません。人々は過越の食事ではこのようにやっていたのです。私たちはこのことを理解するために過越の食事というものを知らないといけません。彼らはどのようにして過越の食事をしたのでしょうか？

◎過越の食事

簡単に説明すると、主人は四つの杯を人々に配りました。

第一の杯 : 家の主人はまず第一の杯を神の前に祝福します。そして、それをそこに集った人たちに与えます。人々はその杯からその中に入っているワインを飲みます。このワインは水で薄められたものでアルコールの含有量は今私たちが目にするワインとはかなり違います。彼らはその杯を飲みます。そして、みな飲み終わった後、人々は苦菜を食します。その後、主人が過越の説明をします。そして、人々は主に賛美をささげます。この賛美は詩篇113~118篇までを歌うのですが、恐らく、この第一の杯のときには113篇だけか、113篇と114篇か、それは記されていませんが、伝統的にそのように彼らは賛美を主にささげました。

第二の杯 : 同じように主人が杯を配ってみなが飲んだ後、種なしパンを裂いてそれをみなに配ります。それが終わった後に夕食が待っています。そこではいけにえの羊が食されます。

第三の杯 : 夕食の後、祈ってから第三の杯をみなに配ります。それを飲んだ後、残りの賛美を神の前にささげます。先程の詩篇の続き114あるいは115～118篇までを歌います。

第四の杯 : 来るべき王国を祝って、みなが散会する前にその杯から飲んだのです。

このようにして人々は過越の食事を行なったのです。ここでイエスが弟子たちとともに為さったのはこの過越の食事です。

さて、みことばが記していることを今説明したことに当てはめてみると、23-24節に「パンを取ってそれを裂いて人々に語られた」とあるのは、第二の杯を飲んだ後のことです。だから、第二の杯を飲んだ後、主人は種なしパンを裂いてそれを配った後食事に入りますが、その様子のところですか。イエスはパンを配る時にこう言われたのです。「これはあなたがたのための、わたしのからだです。」と、こういう教えをこの場でなされたのです。過越の食事ですから、人々はこの種なしパンを食べる時に思い出したことがあるのです。それはエジプトを出たときのこと、出エジプトの出来事です。奴隷であったイスラエルの民がそこから解放された時のことです。覚えていますか？十の災いがエジプトに下りましたが、最後の災いは、家族の初子が家畜に至るまで殺されるということでした。そして、その災いが下った後、エジプトはイスラエルを急き立てて送り出そうとします。なぜなら、「こんな厄介な者たちをここに置いておくは大変だ。もっと大変な災いが自分たちに起こるだろう。」と思ったからです。急き立てられたものですから、彼らは練り粉の中にパン種を入れることができなかつたのです。普通は粉を練った後パン種を入れて、つまり、イーストを入れて焼くのですが、余りにも急き立てられたので、それができなくて練り粉のままを持って出たのです。そのことを思い出すということです。パン種を入れていないパンを食べるのです。

ですから、本来なら、過越の食事では主人が種なしパンを裂いて配ったとき人々はそのことを思い出したのですが、イエスがここで言われたことは「このパンはわたしのからだです」です。このパンが象徴することは、これまではあのエジプトからの解放のときだったけれども、これからは「わたしのからだ」と言われたのです。つまり、神である方が人としてこの世に来られ、そして、私たちの身代わりとして死んでくださり、贖いを成し遂げてくださった、そのみからだを象徴するということです。その教えをイエスはそこでお与えになったのです。

2) 杯についての説明 25節

25節に「夕食の後」とあります。第二の杯の後、種なしパンを裂いて配った後人々は食事を取りました。それが終わった後ですから、これは第三の杯の時です。恐らく、祈りをささげた後、杯を配っていきませんが、その時に主イエス・キリストはこのようにことを言われました。「この杯は、わたしの血による新しい契約です。」と。皆さんにぜひ覚えていただきたいのは、イエスはここで特別なことを為さったのではないということです。先程も説明したように、こうしてみなは杯から飲んだのです。そして、過越の食事をした人は、エジプトからの解放を思い出しますが、この杯を飲む時に彼らが思い出したことは、十番目の災いがエジプトに下ったとき、つまり、天使がやって来て「その家の家畜に至るまですべての初子を殺す」と言われたとき、「家の門柱とかもいに羊の血が塗られているなら、その家を過ぎ越す。」と言われたそのことです。その杯はその血を意味していたのです。ですから、イスラエルの人々は杯を飲むたびに「そうだ、神様はこうして門柱とかもいに血が塗られている家を過ぎ越してくださり、その初子は死ななかつた。」と、その時を思い出したのです。

イエスは杯を人々に配る前に「この杯はわたしの血による新しい契約だ」、「わたしの血だ」と言われました。かつて、門柱とかもいに塗られた血は子羊の血でした。ここでイエスは「羊の血ではない。神の小羊であるわたしの血だ」と言われたのです。ですから、これからはこの杯を飲むたびに「これからわたしがあなたたちのためにわたしの血を流すこと、つまり、わたしのいのちを捨てるその犠牲を覚えるように。」と、そのことを言われたのです。

*「新しい契約」 : 「契約」というのは神があわれみをもって人との間に定められた取り決めのことです。ここに「新しい契約」と書いてある以上「古い契約」も存在したはずですが。

⇒**古い契約** = 確かに存在していました。それは出エジプト記24章に記されています。24:1-8「1 主は、モーセに仰せられた。「あなたとアロン、ナダブとアビフ、それにイスラエルの長老七十人は、【主】のところに上り、遠く離れて伏し拝め。:2 モーセひとり【主】のもとに近づけ。他の者は近づいてはならない。民もモーセといっしょに上ってはならない。」:3 そこでモーセは来て、【主】のことばと、定めをことごとく民に告げた。すると、民はみな声を一つにして答えて言った。「【主】の仰せられたことは、みな行います。」:4 それで、モーセは【主】のことばを、ことごとく書きしるした。そうしてモーセは、翌朝早く、山のふもとに祭壇を築き、またイスラエルの十二部族にしたがって十二の石の柱を立てた。:5 それから、彼はイスラエル人の若者た

ちを遣わしたので、彼らは全焼のいけにえをささげ、また、和解のいけにえとして雄牛を【主】にささげた。：6 モーセはその血の半分を取って、鉢に入れ、残りの半分を祭壇に注ぎかけた。：7 そして、契約の書を取り、民に読んで聞かせた。すると、彼らは言った。「【主】の仰せられたことはみな行い、聞き従います。」：8 そこで、モーセはその血を取って、民に注ぎかけ、そして言った。「見よ。これは、これらすべてのことばに関して、【主】があなたがたと結ばれる契約の血である。」、モーセは神から律法を頂き、それを書き記しました。そして、その律法をモーセは民の前で読んで聞かせるのです。それを聞いていた民はこのように答えました。「【主】の仰せられたことは、みな行います。」と。神が言われたことはみな守りますという誓いを立てるのです。そのときモーセは、彼らが誓いする前に和解のいけにえとして雄牛をささげたのですが、その雄牛の血の半分はその祭壇にささげたのです。ところが残った半分の血は残しておきました。そして、人々が「私たちは主が仰せられたことはみな守り行います。」と言った時に、モーセはその血を人々に注ぎかけるのです。そして「この血によってあなたたちは神との間に取り決めを為した。」、つまり、契約を結んだということです。

イスラエルの民は約束しました。「神様が仰せられたことはみな守ります。」と。しかし、民はそれを遵守することはできませんでした。なぜなら、神の律法を完璧に守り行なうことは、我々人間にとって不可能なことだからです。ということは、確かに、神はこのような契約を結ばれましたが、神がこの律法をお与えになった目的は、「これを守れば必ず救われる。でも、あなたたちはだれ一人としてその律法を守ることはできない。」ということをも人々に悟らせるためだったのです。律法を守ることによって救われると神は言われましたが、私たちが気付かなければいけなかったことは、どんなに頑張ってもどんなに努力をしても神が要求されているすべての「おきて」を守ることはできないということです。そして、そのことに本当に気付いたら、私たちはただ神の前にあわれみを求めるのです。「神様、守れません。どんなに努力しても頑張ってみても守れません。どうぞ、あわれんでください。助けてください。」と、主の前に助けを、救いを求めるのです。そのために与えられたものです。

ですから、律法は救いを得るための手段ではなかったのです。律法は自分自身では救いを得ることができないということを悟らせる神の基準だったのです。それが古い契約でした。大変重たい契約でした。⇒**新しい契約** = イエスは「新しい契約」と言われました。しかも、この新しい契約は動物の血による契約ではなくて、「わたし自身の血による契約だ」と言われました。そして、この血によって何が起るか？イエスを信じる一人ひとりの罪が赦される、罪からそののろいから、永遠のさばきから救い出されるのです。古い契約は私たちにとって重荷でした。でも、新しい契約はそこからの解放です。罪からの解放です。しかも、動物の血によってではなく、イエス・キリストの血潮による救いです。そのことをイエスはここで話されたのです。

皆さん、私たちは旧約の人々を見て、今でこそ私たちは新約を持っているから、神のメッセージが分かり、神が旧約にあって律法をお与えになったのは、神のあわれみ神の救いが私たち罪人には必要なことだと教えるためだと理解します。ですから、その律法も律法自身ではなく、神が備えてくださる救いを指し示していたのです。そして、イエスは「律法が指し示していたその救いがわたしだ」と言われたのです。だれ一人として神の律法を完璧に守れませんでした。しかし、この新しい契約を結んだクリスチャンである私たちは、今度は神の律法を守ることができるようになったのです。神の律法は救いを得るための手段ではありませんでした。それが証拠に、だれ一人としてそれを守ることはできない。でも、救いに与った私たちは、救われたことの証として神の教えを實踐することができる者になりました。

皆さん、大切なことです。行ないよって救いを得ることはできません。でも、救われた私たちは、神が命じておられること、神が教えておられること、それを守ることが出来る者へと変えられたのです。神の助けによってそれが可能となったのです。ですから、イエスが言われたことは「この血による新しい契約だ。それは重荷ではなくて、あなたたちに本当の救いをもたらすものだ。なぜなら、動物ではなくて、神の小羊のいのちが血が注ぎ出されたから。」です。ヘブル9：28に「キリストも、多くの人の罪を負うために一度、ご自身をささげられました。二度目は、罪を負うためではなく、彼を待ち望んでいる人々の救いのために来られるのです。」とある通りです。

ダラス神学校新約の教授だったディヴィット・ラウリー先生は「古い契約の中心は、書き記されたことばである（出エジプト24：1-8）。新しい契約の中心は、活きたことばである（ヨハネ1：14-18）。」と言います。ヨハネ1：14-18「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。：15 ヨハネはこの方について証言し、叫んで言った。「『私のあとから来る方は、私にまさる方である。私より先におられたからである』と私が言ったのは、この方のことです。」：16 私たちはみな、この方の満ち満ちた豊かさの中から、恵みの上にさらに恵みを受けたのである。：17 というのは、律法はモーセによって与えられ、恵みとまことはイエス・キリストによって実現したからである。：18 いまだかつて神を見た者はいない。父のふとこ

るにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである。」、律法ではなく主イエス・キリストご自身であると言うのです。私たちはこの主イエス・キリストによって救いに与ったゆえに、神によってこの新しい契約に生きる者とされたのです。

2. 聖餐式に関する二つの命令

この命令は24節にも25節にも出て来ました。パンを取った後「わたしを覚えるため、このようにしなさい。」、杯に関しても「わたしを覚えるため、このようにしなさい。」と同じことばが繰り返されています。二つの命令です。

1) 「覚える」 = つまり、あなたがパンを取る時に、杯を取る時に覚えなければいけないと言うのです。何を覚えるのか？このパンと杯が何を意味するのか？それは、主イエス・キリストを覚えるということです。でも、これは「イエス・キリストが十字架で死んだのだ」という歴史的な事実をただ思い出すということではないのです。それ以上のものです。あの十字架に架かれた主とあなたとの可能な限りの活きた親しい交わりを訴えているのです。私たちのために死なれたのではない。「私のために主が死んでくださった」、その主とあなたとの個人的な関係において活きた交わりを持ちなさいと、そのことを命じているのです。私たちがイエスの十字架を覚えるときは、イエス・キリストが十字架で死んでくださったという以上のことです。主イエス・キリストは私を救うために、罪のないご自身のいのちを犠牲にしてくださいました。主イエス・キリストは十字架に掛かって私が受けるべき罪ののろいを代わって受けてくださいました。私に対する父なる神の怒りを、主は残らずあの十字架で受けてくださいました。主イエス・キリストの打たれたムチも、主イエス・キリストが経験された人々からの嘲りも、私たちが想像することも出来ないあの痛みも、十字架の苦しみのすべては私のためだった。出来る限り、私たちはこの十字架に架かって私のために死んでくださったイエスと活きた関係を持つこと、活きた交わりを持つようにと言っているのです。

信仰者の皆さん、イエスがムチを打たれた時にイエスが上げられた悲鳴の音が聞こえませんか？イエスが重い十字架を担いでゴルゴダに向かって行かれる時に、体からは血が溢れ出ていました。そんな状態で十字架をゴルゴダまで運ぶことは出来ませんでした。あの痛みもあの傷もすべてあなたのためだった。人々はそのイエスを見て嘲りました。罵声を浴びせました。だれ一人として、なぜイエス・キリストがこんな苦しみに遭っているのか分かっていませんでした。しかし、イエス・キリストはあなたのためにその十字架を負い、あなたの十字架を負って十字架の処刑の場であるゴルゴダへと向かって行かれたのです。その手に釘が打ち込まれたとき、その足に釘が打ち込まれたときの悲鳴、聞こえますか？私たちが覚えなければいけないことは、なぜ、神がここまで私たちのためにする必要があったのかということです。「思い出しなさい」、主があなたのために何をしてくれたのか？

2) 「行ないなさい」 = パウロは二つ目に「このようにしなさい」と言います。命令形であり現在形です。つまり、私たちはこの聖餐式を継続して行ない続ける必要があります。みことばの中には、どれくらいの周期でということはありません。しかし、私たちはこの聖餐式を守り行なっていくことが必要です。聖餐式を行なう時に私たちが覚えなければいけないのは、エジプトからの解放ではありません。私たちが覚えるのは、主イエス・キリストによる罪からの解放です。

3. 聖餐式に関する二つの警告

26節からは聖餐式に関する二つの警告が記されています。

1) 目的を果たす 26節

「ですから、あなたがたは、このパンを食べ、この杯を飲むたびに、主が来られるまで、主の死を告げ知らせるのです。」。主が来られるまで、私たちがこの地上を歩んでいる限り、この地上で生きている限り、私たちに大きな務めがある。それは、主イエス・キリストのあの十字架の死を人々に告げ知らせることだと言います。創造主なる神が十字架で払ってくださった犠牲、主イエス・キリストが成し遂げてくださった完全な救いを人々に語り続けて行く、それが私たちの務めであるとそのようにパウロは言います。

2) 自らを吟味する 27-28節

「したがって、もし、ふさわしくないままでパンを食べ、主の杯を飲む者があれば、主のからだに血に対して罪を犯すこととなります。:28 ですから、ひとりひとりが自分を吟味して、そのうえでパンを食べ、杯を飲みなさい。」

(1) ふさわしくない人 : 罪を持ったままの人

つまり、ふさわしくないままで聖餐式に出るなら、あなたは主に対して罪を犯すことになる、大変恐ろしいことがここに記されています。この「ふさわしくないままで」という副詞は「それらの価値と一致しない、不適當」ということです。つまり、神の前に立つにふさわしくない、不適當な状態であってはいけない、もしそうなら、あなたは罪を犯しているのだと、そのように警告するのです。「ふさわしくないまま、不適當な人」とはいったいどういう人のことでしょうか？どのような姿で聖餐式に与ることが罪なのでしょう？それは罪を持ったままで聖餐式に与ることです。

聖餐式とは、キリストの死、あの贖いのみわざを覚えることです。イエスが私のために十字架で死んでくださった、私の犠牲となってくださった、それを覚えることです。言い替えるなら、あなたのために味われたキリストのその痛みや苦しみ、恥辱、また、その死を覚えて、そして、救われたことを感謝し、その救い主を崇める機会です。それが聖餐式です。しかし、もし「罪の赦しを感謝します」と言いながら、主が憎まれ主を十字架にかけた罪を愛しているなら、それは偽善者のことです。栄光ある主の前に、聖い神の前に罪を持ったまま出て来るとするのは、神を恐れていないことの証拠です。主なる神への畏敬の念が欠けているのです。そのような人を神は歓迎されません。

皆さん、パウロが警告すること、パウロはこれは主からのメッセージだと言っています。もし、あなたの心の中に罪が存在し、そして、その罪を持ったまま聖餐式に着くなら、あなたは神の前に罪を犯していると言います。なぜなら、神はあなたの心を知っているからです。あなたの心の中にあるその罪を知っているのです。それは人に対する憎しみかもしれないし、怒りかもしれないし、どういう罪であったとしても、あなたが救われているのなら神はあなたにそれを示し続けてくださっています。でも、あなたがそれを隠し続け、心の中に温存し続けているなら、あなたがその状態でありながら聖餐式の場に出て、パンと杯を受けて「私は感謝します。」と言うことは、神はそれを喜ばれないだけでなく、「あなたは罪を犯している」と警告をされるのです。大変恐ろしいこと、そして、厳しいことを神は言われています。なぜなら、神は聖いお方だからです。どんな罪でも神は喜ばれないし、お受けになりません。そのような神なのです。そのような神の前に私たちは生きているのです。ふさわしくないままで主の前に出てはならないと言います。

(2) ふさわしい人 =

では、ふさわしい人とはどのような人でしょうか？四つのことを挙げています。

a. 主を心から感謝している人

詩篇 92 : 1 「【主】に感謝するのは、良いことです。いと高き方よ。あなたの御名にほめ歌を歌うことは。」、詩篇 103 : 2 でも「わがたましいよ。【主】をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。」とあります。ですから、主の前に立つにふさわしい人、神が喜んで迎えてくださる人とは、主に感謝をしている人です。「主はすばらしい恵みを私に与えてくださった」と、そのことを覚えそのことを感謝している人、主を心から感謝し誉め称えている人、そういう人を神は喜んで迎えてくださるのです。

b. どのように自分の感謝を表そうかと考えている人

なぜなら、主の犠牲を思い主への深い感謝をもっている人はそのように考えるはずだからです。詩篇 116 : 12-14 に「主が、ことごとく私に良くしてくださったことについて、私は【主】に何をお返ししようか。:13 私は救いの杯をかかげ、【主】の御名を呼び求めよう。:14 私は、自分の誓いを【主】に果たそう。ああ、御民すべてのいる所で。」とあります。当然でしょう。こんなに神が私に良くしてくださった、私は何をもって神にこの感謝を表わせば良いのだろうと、そのように考えている人を神は喜んで迎えてくださるのです。

c. 主に自分の不信仰を悔い改めている人

あなたがあなたに対する神の深い愛を覚える時に、主イエス・キリストのあの犠牲を覚える時に、自分自身の行ないを神はあなたの前に示してくださり、あなたがどのように生きているか、神はあなたのためにそれを示してくださる。そうすると「情けないな、悲しいな、」とそのことに気が付きます。「神さま、これ程までにご自分のいのちを犠牲にして私を愛し救いをくださったにも関わらず、私が神さまに対して為していることは不完全で、中途半端で、いったい何をしているのか？神が憎まれる罪から離れるどころかその罪を時には愛して、その罪を選択してしまっている。」と…。だから、その人は神の前に自分の罪を悔い改めます。「神さま、どうぞ赦してください。私は余りにも愚かで、余りにも罪深い者です。罪から離れようとしながら罪に罪を重ねている愚かな者です。赦してください。」と、そのように心から悔い改める者を神は受け入れてくださるのです。

d. 主にすべてを捨てようと考えている人

なぜなら、私の主が私のためにすべてをささげてくださいましたことを心から感謝している人は、この方のためにすべてを捨てようとするからです。多くの信仰者はそのように生きました。主イエス・キリストのために喜んで自分のいのちを犠牲にしました。なぜなら、彼らは分かっていたのです。自分のいのちよりもこの主の方が大切だということを…。このお方は自分のいのち以上に価値のあるお方だと。

*それは犠牲でも無駄なことでもない

皆さん、今私たちはこの瞬間に呼吸しています。そして、また呼吸をしました。それはすべて神があなたにあわれみをもって与えてくださっているのです。あなたの意志で呼吸しているではありません。すべて神のあわれみなのです。創造によって神はあなたにいのちを与えてくださった。そして、十字架の贖いによってあなたに永遠のいのちを与えてくださった。この私たちの主よりも大切な方が他にいま

すか？私たちが主イエス・キリストを信じた時に、私たちは「この世のありとあらゆるものよりもあなたを愛します」という決心をしたはずです。覚えていますか？イエスはこのように言われました。ルカの福音書 14 : 26 「わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、そのうえ自分のいのちまでも憎まない者は、わたしの弟子になることができません。」と。イエスの救いのメッセージは「天国に行きたい、それならイエスを信じなさい」というようなメッセージではなかった。あなたがわたしに従って来るのなら、あなたは喜んですべてのものを捨てることができますか？と問われたのです。わたしについて来るのなら、あなたは喜んで自分のいのちまでも捨てる、その決心ができますか？と。まさに「狭い門からはいれ」という救いのメッセージです。イエスは「あなたの愛する家族を憎みなさい」と言っているわけではありません。「あなたはあなたが愛するものよりもわたしを愛するか？」と問われたのです。「あなたのいのちよりもわたしを愛するか？」と問われたのです。そのことを私たちは前回学びました。畑に隠された宝の話をお出ししてください（マタイ 13 : 44-46 「天の御国は、畑に隠された宝のようなものです。人はその宝を見つけると、それを隠しておいて、大喜びで帰り、持ち物を全部売り払ってその畑を買います。:45 また、天の御国は、良い真珠を捜している商人のようなものです。:46 すばらしい値うちの真珠を一つ見つけた者は、行って持ち物を全部売り払ってそれを買ってしまいます。」）。彼らは宝を見つけた時に自分の持ち物を売ってその畑を買ったとあります。すばらしい値うちの真珠を見つけた人はどうでしたか？自分のすべてを売り払ってその真珠を購入しました。なぜそうしたのか？自分の持っているものよりもその宝がその真珠がすばらしいという、その価値に気付いたからです。そうして救いに与ったのです。信仰者の皆さん、私たちが覚えなければいけないのは、私たちのいのちよりも、持っているものよりも主のほうが尊いということです。この方に優る方はいません。なぜなら、この方は私たちのためにいのちを捨ててくださったからです。この方は私たちがこの世のどんなものをもって得ることができない救いを与えてくださったのです。ご自分のいのちを犠牲にして、それを与えてくださったのです。

主が喜んで迎えてくださる方、それは「神さま、私はあなたを愛しています。私の持っているありとあらゆるものよりも、私のいのちよりもあなたを愛しています。」と、そのような思いを持って主の前に出て来る人たちです。だから、私たちは自分の心を吟味することが必要なのです。そのことが記されています。27-28節「したがって、もし、ふさわしくないままでパンを食べ、主の杯を飲む者があれば、主のからだに血に対して罪を犯すことになります。:28 ですから、ひとりひとりが自分を吟味して、そのうえでパンを食べ、杯を飲みなさい。」と。自分の心をよく探って見なさい、あなたの心の中に罪がないかどうか。もしあるなら、それを主の前に告白して、聖められて主の前に出て来なさいと言うのです。

3) ふさわしい人であり続けるために

28節に「ひとりひとりが自分を吟味して、」とある通り、自分を吟味することです。Ⅱコリント 13 : 5 「あなたがたは、信仰に立っているかどうか、自分自身をためし、また吟味しなさい。それとも、あなたがたのうちにはイエス・キリストがおられることを、自分で認めないのですか——あなたがたがそれに不適格であれば別です。——」、ガラテヤ 6 : 4 「おのおの自分の行いをよく調べてみなさい。そうすれば、誇れると思つたことも、ただ自分だけの誇りで、ほかの人に対して誇れることではないでしょう。」

【結論】

私たちクリスチャンが聖餐式に臨むとき、まず、私たちは自分の心を正直に探ることが必要です。神が悲しまれる罪を持っていながら「主を愛しています」と言って聖餐の式に着くことは罪です。あなたの罪を主の前に悔い改めて主の前に立つことです。ルカ 11 : 42 をご覧ください。「だが、わざわざだ。パリサイ人。おまえたちは、はっか、うん香、あらゆる野菜などの十分の一を納めているが、公義と神への愛はなおざりにしています。これこそしなければならぬことです。ただし、十分の一もなおざりにしてはいけません。」、しかし、皆さん、信仰生活を長年送っていると、悲しい現実、いつの間にか神に対する愛が冷えて来たと感じるのです。本来なら、その愛は成長しているはずなのにだんだん冷たくなっている。もし、そのようなことを経験している人がおられるなら、次のアドバイスを差し上げたいと思います。

*かつての愛が冷えていないか？

・「あなた」に対する主の犠牲を思い出すこと

主イエス・キリストがあなたのために何をしてくださったのかを思い出すことです。

・「あなた」の間違った、主に喜ばれない選択を悔い改めること

どこかで私たちは間違つたのです。どこかで私たちは罪を犯しその罪を容認して来たのです。自分の落ちたところを探ってみてそこに立ち返ることです。「神さま、私を赦してください。私はあなたの前に罪を犯すことによって、こうして今私の心の中からあなたへの愛が徐々に目減りしていることに気がきます。」と。

・「主」が喜ばれることを選ぶ決心をすること

「神さま、私はこれからあなたが喜ばれることを決心していきます。あなたがお喜びになることを私は選択して行きます。」と。

・「主」に助けを求めること

恐らく、これが一番大切なことでしょう。私たちは神に助けを求めることに躊躇します。自分が頑張らなければいけないと…。でも、私たちが神を愛するために必要なのは神の助けなのです。「神さま、私はあなたを愛しています。でも、私の愛は不完全です。どうぞ、私の愛を増し加えてください。私の信仰が成長するように助けてください。もっとあなたに喜ばれることを為していくために私を助けてください。」と、そのように祈ることは間違っていないのです。私たちの歩みにおいて神の助けがいます。そうして私たちは歩んでいくのです。

今日、私たちが見て来たのは、私はどのような心を持って主の前を歩んでいるのかということでした。聖餐式だけではないのです。今日までどのような心を持って歩んで来たのか？そして、これからどのように歩んでいくのか？です。私たちに必要なことは、しっかりと主の十字架を見上げて、そして、この主に対してどのように生きていくのかを私たち自身が選択することです。主の為にくださったみわざに心からの感謝をもって、そして、その感謝を表わしていくことです。どのようにしてですか？主のみことばに従い続けていくことによってです。

この後、皆さんにパンと杯をお配りします。今日私たちが見て来たように、自らの心をしっかり吟味してください。あなたの心の中に罪がないかどうか。もしあるなら、それを今あなた自身が主の前に告白して、赦しを頂いてからこのパンと杯に与っていただきたいと思います。

《考えましょう》

1. コリント教会の「聖餐式」が、主に喜ばれていなかったのはどうしてですか？
2. 主が喜ばれる「聖餐式」をささげるために、何が大切かを挙げてください。
3. 主はどうしてそのこと（2の答え）を喜ばれるのでしょうか？
4. 自分の心を吟味することが、どうして大切なのでしょうか？
5. 自分の心を吟味するためには、どうすれば良いと思われませんか？